世界聖餐日礼拝説教 「富 よ り も 友」

日本基督教団石神井教会　2019 年 10 月 6 日

【使徒書日課】テモテへの手紙一　6章1～12節

1軛の下にある奴隷の身分の人は皆、自分の主人を十分尊敬すべきものと考えなければ
なりません。それは、神の御名とわたしたちの教えが冒涜されないようにするためです。
2主人が信者である場合は、自分の信仰上の兄弟であるからといって軽んぜず、むしろ、
いっそう熱心に仕えるべきです。その奉仕から益を受ける主人は信者であり、神に愛され
ている者だからです。

これらのことを教え、勧めなさい。3異なる教えを説き、わたしたちの主イエス・キリ
ストの健全な言葉にも、信心に基づく教えにも従わない者がいれば、4その者は高慢で、
何も分からず、議論や口論に病みつきになっています。そこから、ねたみ、争い、中傷、
邪推、5絶え間ない言い争いが生じるのです。これらは、精神が腐り、真理に背を向け、
信心を利得の道と考える者の間で起こるものです。6もっとも、信心は、満ち足りること
を知る者には、大きな利得の道です。7なぜならば、わたしたちは、何も持たずに世に生
まれ、世を去るときは何も持って行くことができないからです。8食べる物と着る物があ
れば、わたしたちはそれで満足すべきです。9金持ちになろうとする者は、誘惑、罠、無
分別で有害なさまざまの欲望に陥ります。その欲望が、人を滅亡と破滅に陥れます。10金
銭の欲は、すべての悪の根です。金銭を追い求めるうちに信仰から迷い出て、さまざまの
ひどい苦しみで突き刺された者もいます。

11しかし、神の人よ、あなたはこれらのことを避けなさい。正義、信心、信仰、愛、忍
耐、柔和を追い求めなさい。12信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。
命を得るために、あなたは神から召され、多くの証人の前で立派に信仰を表明したのです。

【福音書日課】ルカによる福音書　16章1～13節

1イエスは、弟子たちにも次のように言われた。「ある金持ちに一人の管理人がいた。
この男が主人の財産を無駄遣いしていると、告げ口をする者があった。2そこで、主人は
彼を呼びつけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報
告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』3管理人は考えた。『どう
しようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、
物乞いをするのも恥ずかしい。4そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、
自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』5そこで、管理人は主人に借
りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』
と言った。6『油百バトス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急い
で、腰を掛けて、五十バトスと書き直しなさい。』7また別の人には、『あなたは、いく
ら借りがあるのか』と言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあ
なたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』8主人は、この不正な管理人の抜け目の
ないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるま
っている。9そこで、わたしは言っておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そ
うしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。

10ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、
大きな事にも不忠実である。11だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれ
があなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか。12また、他人のものについて忠実
でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか。13どんな召し使いも二人
の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽
んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

主の食卓に迎えて

今日は、通常の主日礼拝を「世界聖餐日礼拝」として、少しばかり礼拝順序を変更して執り行っています。「世界聖餐日」は、世界中の教会が聖餐を通してキリストにある交わりを確かめ、全教会の一致を求めて制定されました。わたしたちも、この記念日をおぼえて、ただ名を冠するだけでなく、少しでも諸教会と一つであろうとする姿勢の表れとして礼拝順序や讃美歌の選曲を整えて、この礼拝を迎えました。戸惑いを覚える方もあるかもしれませんが、それは新しい関係を作っていくためには避けることのできないことです。むしろ、そのような戸惑いは、新しい扉を開こうとする期待に置き換えたらよいのです。その扉を開いて行くとき、いつか、見たことのない風景を見るときが訪れるでしょう。

福音書日課（ルカ 16 章）で、わたしたちは今日も、食事の会の中で告げられた主イエスの教えに耳を傾けています。14 章で物語り始められた、ある食事会でのことです。きっと、盛大な食事会だったのでしょう。主イエスのお語りになられた教え、特にたとえ話は、いずれも、人を招いて開かれる宴会が結末に示唆されていました。先週聞いた「放蕩息子のたとえ」も、そうでした。財産を無駄遣いして一文無しで帰って来た弟息子を迎えて、父親は盛大な宴会を催したのです。並んで語られていた「見失った羊のたとえ」と「無くした銀貨のたとえ」でも、羊や銀貨を見つけ出した人が、大喜びで「友達や近所の人々を呼び集め」（ルカ 15:6、15:9））て一緒に喜んだと、語られていました。もちろん、人を呼び集めたのですから、食事の会を催して喜びを分かち合ったということでしょう。

わたしたちも、教会の営みの中で食事の会を催します。クリスマスやイースターには「愛餐会」と呼ぶ大きな食事会をいたします。「青年ランチ」は、必ずあるわけではありませんが、人がいればできるだけ開くように勧めています。主イエスがさまざまな人と食事を共になさることを大切にされていたのですから、わたしたちも、食事を共にする機会がもっとあっても良いのでしょう。

もちろん、わたしたちにとって一番大切な「食事の会」は、礼拝の中であずかる「聖餐（主の食卓）」です。「世界聖餐日」も、この「聖餐」の食卓にすべての者が共にあずかるようになることを、最終的な目標にしています。残念ながら、教派が異なると一つの「聖餐」にあずかることができないことがあります。また、洗礼を受けていない方は、このパンと杯に共にあずかっていただくことができません。それでも、「聖餐」は、わたしたちの「食事の会」の究極の姿で、ここにすべての人が共に連なるようになることを願っているのです。

不正で不忠実な者

そういう意味では、「放蕩息子のたとえ」は、わたしたちの願いの原点にあると言ってもよいでしょう。「**この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった**」（ルカ 15:24）と、たとえの中で父親は語っていました。わたしたちも皆、父である神のもとに立ち帰らせていただいた一人ひとりです。父である神が、このわたしのために「宴会」を開いて祝ってくださるということを信じて、洗礼・堅信にあずかり、聖餐の食卓に共に着かせていただくようになりました。だれもが、そのようにしてこの食卓に着いてほしいと願います。

ただ、なお問題があります。あのたとえの後半に描かれていた「兄」と、同じ食卓に着くことができていないのです。「兄」は、父の家にずっといた者であったのに、「弟」のために催された「宴会」に共に加わることを、拒んだのです。「父」の願いにも関わらず、「弟」と「兄」との間には、なお深い溝が残されている。それは、今の時代に至るまでの「教会」の現実の姿でもあるのです。

その「放蕩息子のたとえ」をお語りになられていた主イエスが、不意に弟子たちのほうに向きなおって、あらためて教えを語られたというのが、今日の「不正な管理人のたとえ」として知られる場面です。

この場面、学者泣かせのようです。わたしたちも、もしかしたら大急ぎで読み飛ばしてしまいたくなるところかもしれません。たとえ話ですから誇張があるのでしょうが、主人の財産を無駄遣いした挙句、不正を働いた管理人が、しかし自己保身のためにおこなった「**抜け目のないやり方**」を主人にほめられてしまう、というのです。しかも、主イエスは「**不正にまみれた富で友達を作りなさい**」とまでおっしゃられる。ずる賢さを勧め、不正を黙認するかのようでは、わたしたちの倫理観はどうなってしまうかと思います。実際、この場面で一部始終を聞いていたある人が、主イエスのことをあざ笑ったと、続く箇所（14 節）で伝えています。当然でしょう。百歩譲っても、「神の国のためならば、どんなにずる賢くても、不正を働いても、構わない」とは決して言えないと思います。

なぜ、主イエスは、このような難解なたとえと教えを弟子たちに語られたのでしょうか。それは、もしかすると、「放蕩息子のたとえ」をお語りになられて、「弟息子」と「兄息子」の間になお横たわる断絶を、弟子たちには乗り越えさせたいと願われたからではないでしょうか。どうにかして、「弟息子」と「兄息子」が、「父」の催す一つの「宴会」に共にあずかるようになる道を、このたとえで弟子たちにお示しくださろうとなさっているのではないでしょうか。

実は、繰り返し出てくる「不正（アディキア）」という語は、10 節の「不忠実な者（アディコス）」と同源の語で、「不義」という意味の語です。その「不忠実な者」と対で出てくる「忠実な者（ピストス）」という語は、「信仰（ピスティス）」と同源の語です。ついでに言えば、11 節の「任せる（ピスティオ）」も同じ語の動詞形です。そうすると、「不正な管理人」というのは、要は「不信仰な管理人」ということです。それは、誰あろう、いまだ互いを受け入れ合うことができないでいる「弟」と「兄」、つまり、わたしたちのことなのではないでしょうか。

神への《借り》を赦す

わたしたちのほとんどの者は、仕事で託された金銭をごまかしたり、会計で不正を働いたりしたことはないでしょう。多少は無駄遣いしてしまったり、損を出してしまったことならばあるかもしれません。中には、それによって異動させられたという経験のある方も、少しはいらっしゃるかもしれません。

社会的にはそうかもしれませんが、ひとたび神の前に立たされたならば、どうでしょうか。「自分は、神からいただいたものを少しも無駄遣いしていない」と、自信をもって言える人が、いるでしょうか。そう言えるという者は、やはり、立ち止まってもう一度自分自身を見つめ直して、神に提出する「報告書」を作成し直さなければいけないでしょう。実際、わたしたちは、自覚なしに、どれほどの恵みの無駄遣いをしていることか。「子」の立場では、「親」の財産を無駄遣いしていることに、無頓着なのです。

「放蕩息子のたとえ」の「兄息子」も然りです。彼に対して「父親」は、「**子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ**」と言いますが、彼自身は、自分が「**友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかった**」と思っているというのです。彼は、そう思っていたので、宴会を開いて「友達」を迎えることもしなかった、ということなのでしょう。

けれども、主イエスは今日、おっしゃるのです、「**友達を作りなさい**」と。しかも、「**不正にまみれた富で！**」。

わたしたちは、「不正」な者でしかありえないのです。「忠実な信仰者」でありたいと願っていても、わたしたちはなお、「不正な、不義の者、不忠実な不信仰者」と変わりないから、互いの間になお溝があり、断絶が埋まらないでいる。

それでも、主イエスは、「不信仰な者であっても、まだできることがある。友を作り、共に主の食卓、神の国の宴会にあずかる道がある」と、弟子たちを励ましてくださっているのではないでしょうか。

不正な管理人がほめられたやり方は、こうです。主人に「借り」のある者を呼んで、その者たちの「借り」を減免してやります。そうすることで、彼らが自分のことを「友」として受け入れてくれるようにしました。

このような話を、わたしたちはどこかで聞いてきました。借金を帳消しにしてもらう話です（ルカ 7:41~42）。神は、莫大な借金をすべて赦してくださるようなお方だと、主イエスは何度もお教えくださった（マタイ 18:21~35）。そして、「**わたしたちの罪を赦してください。わたしたちも自分に負い目（＝借り）のある人を皆赦しますから**」（ルカ 11:4）と祈るように教えられた。人を何度でも赦して、友として受け入れるようにと、主イエスはお教えになられたのです。

自分に対する借りを赦すことは、難しいかもしれません。けれども、神に対する借りを「赦された」と告げることは、できるのではないでしょうか。そうしてよいと、主はおっしゃられたのです。たとえ「不正な不忠実な僕」であっても、わたしたちは、そこから「友を作る」ことを始められるのです。神の御前に開かれる「大宴会」に一緒に与る「友」が、あなたを迎え入れてくれるのです。